

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格⑦

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章3-5節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

聖書をお持ちの方はどうぞIテモテ3章をお開きください。

先週、メッセージの準備をしていて驚きました。私たちがこのIテモテ3章を通して霊的リーダーのあるべき姿を学び始めてから、何とかこれもう約2カ月がたとうとしています。しかもまだ私たちは3節にいます。皆さんの中にも一体このシリーズはどこまで続くのだろうかと思っている方もおられるかもしれません。でもここまで時間をかけてみことばを見ているのは、霊的リーダーについて正しく理解していることがひとりひとりの信仰生活にとってとても大切なことだからです。なぜなら神様はだれにでもご自身の教会を任せようとはされていないからです。教会を導いていくリーダーに対して、非常に明確な基準を設けておられる。これまでに11個の監督の資格を私たちは見てきました。非難される場所のないことも、ひとりの妻の夫であることも、自分を制することも、慎み深いことも、品位があることも、よくもてなすことも、教える能力があることも、酒飲みでないことも、暴力をふるわないことも、温和であることも、争わないことも、それらはどれをとっても非常に厳しい基準でした。でも神様はこうやって明確な基準を設けることによって、ご自身の教会を間違った教えや偽りのリーダーたちから守ろうとされているのです。このみことばを見る時に、私たちはそんな神様の愛や深い知恵を見て取ることができます。感謝なことだと思いませんか？

また同時に、もう何度も繰り返し言っていることですがけれども、これらの資格はリーダーだけのものではなく、私たちひとりひとりが目指していくべき霊的に成熟した者の姿でもありました。こうしてみことばを見ていく中で、自分の歩みが余りにも神様の基準からかけ離れていることに気づいて、自分の罪深さで悲しみや失意に打ちのめされている人もいるかもしれません。もしそうだとすれば、いま一度覚えてください。神様はどれだけ私たちが罪深い存在かを知らずに救いを与えてくださったのではなかったということです。神様は私たちがどうしようもないほどに罪に汚れ、愚かであるということを知っていてなお、恵みによって救ってくださったのです。そして、それだけでなく、救われた私たちがキリストに似た者へと変わっていくのに必要な助けをも備えてくださいました。確かに罪と向き合うことには、時に痛みを伴います。でもキリストに似た聖い者へと変わっていく時にこそ、私たちの喜びは増し加えられるのです。だとすれば、続けてみことばの定めている目標を学んで、キリストを見上げ、神様の助けを祈り求めながら、霊的成熟を目指していきましょう。

では、早速内容を見ていきたいと思えます。まず、みことばをお読みします。

Iテモテ3：1-7

「：1「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。：2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難される場所がなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、：3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、：4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。：5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——：6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。：7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

○監督とその資格⑩：金銭に無欲で 3c節

さて、監督の15個の資格として、パウロが12個目に挙げていたものは、金銭に無欲であることでした。3節の一番最後に「**金銭に無欲で**」と出ています。教会を監督する者はお金に関しても非難されるところのない人物であることが求められていました。

1. 定義

では、金銭に無欲であるというのは、具体的にどんなことを指しているのでしょうか？実はこの「**金銭に無欲で**」と訳されていることばは、もともと三つのギリシャ語がくっついて成り立っていることばです。その三つというのは、まず否定を意味する“ア”、次に「何かに対して愛情を示す」とか「だれかを愛する」という意味の“フィロス”、そして最後に「銀」や「銀貨」を意味する“アルギュロス”です。これら三つのものが結びついて“アフィラギュロス”、直訳すれば「銀貨を愛さない」という意味のことばです。もちろん勘違いしてほしくないのは、パウロは何もここで銀貨だけを非難していたのではなかったということです。この当時、銀貨というのは人々の間でごく一般的に用いられていた硬貨でした。ですから、パウロはほかのお金、金貨や銅貨といったものなら愛しても大丈夫で、銀貨だけはだめですということと言わんとしたのではなく、お金ならどんなものであったとしても、それを愛することは問題なのだと訴えていたのです。監督の働きをする者はどんなお金であろうと、それを愛する者であってはいけない、それがここでのポイントでした。教会を導くリーダーは金銭に関して貪欲な人物でないことが求められていました。

2. 危険性

ここで少し考えてみてください。一体どうしてパウロはお金を愛することが問題だと訴えていたのでしょうか？一体なぜ霊的リーダーにとって金銭に無欲であることが欠かせない条件だったのでしょうか？それはもう皆さんも容易に想像できるように、お金を愛するということが大きな危険や問題を伴うからでした。そしてその危険性をよくわかっていたパウロは、同じテモテの手紙の中で、そのことについても触れていました。Iテモテ6：9-10を見てください。そこでお金を愛することがなぜ危険なのかをパウロは記していました。「**9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。：10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。**」、一体なぜお金を愛することが危険なことなのか、パウロは「**金銭を愛することが、あらゆる悪の根**」なのだとはっきり記していました。

ただしここで注意してほしいことがあります。それはパウロは「**金銭を愛することが、あらゆる悪の根**」であると言ったのであって、金銭があらゆる悪の根であるとは言っていないということです。違いはわかりますよね？みことばはお金そのものが悪だとは教えていませんでした。人が富や財産を持つことも、それ自体は別に良くも悪くもないのです。私たちは持っているお金を用いて家族を養ったり、困っている人を助けたりすることもできます。しかし、同時に同じお金を用いて自分の欲望を満足させたり、悪事を働くこともできるのです。ですからここで問われていたのはお金そのものではなく、お金を愛することでした。そしてパウロは金銭を愛するその心こそがあらゆる罪を生み出す悪の根なのだと警告したのです。

お金を愛する心というのはさまざまな問題を引き起こす、これがどういうことを意味するかは、お金を愛している人、金銭のとりこになっている人がどんなことをするのかを想像すれば容易に理解することができます。そういう人の関心はお金にあるのです。この世の人たちは自分が豊かになるためであれば周りの人を気かけようともしません。そして貪欲な心がその人を支配するようになれば、次第に貧しい人を利用したり、自分の利益のためであれば人に嘘をついたり、人をだますといったことにつながっていくのです。金銭を愛することがあらゆる罪へとつながっていくのだと教えます。バークレー師はわかりやすくこのように述べていました。「**富への欲望は人間の思いを自分自身に固着させ、他人はすべて自分が豊かになるための手段となる**」と。だからこそお金を愛することは私たちの心に大き

な問題をもたらす危険なものになるのです。ここまで聞いてきて、ある人はこう思っているかもしれませんが。お金を愛することが問題なのはよくわかりました、でも、実を言うと自分はそんなにお金持ちになりたいなどと願ってもいないし、そんなにお金を愛しているとも思いません、私は大丈夫だと思えます。もしそのように感じている方がおられるのであれば、よく自分自身の心を吟味してみてください。確かにあなたはお金そのものに心が奪われていないかもしれませんが、しかし、お金を愛することが危険なのは、お金というものが私たちのさまざまな願いや欲に密接に関係するものだからです。

どういうことかと言うと、例えばヨハネはIヨハネの中で、世にあるものを愛してはならないと兄弟たちに忠告した後で、具体的に人々が陥りやすい三つの欲を挙げていました。そのことがIヨハネ2：15-16に、「:15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」と記されています。ここでよく考えてみてください。私たちが罪へと誘惑するようなこれら三つの欲はお金と密接に関係していると思いませんか？例えばお金は私たちの肉が望んでいる物を与えることができます。安心や安全といったものもそうです。お金は私たちに言うのです、あなたはもう十分な蓄え思っています、それだけの蓄えがあればこれからどんなひどいことが起こったとしても大丈夫だ、お金さえあればどんな問題も解決できる、あなたはもう安全なのだ。またお金は、私たちの目の望む物も与えることができます。お金は言うのです、自分の目に入るものは何でも買えばいい、買い物に行つて欲しい物はすべて手にすればいい。お金があれば、それらの物を買うことができる、そうすれば、あなたは満足することができる。またお金は、私たちの暮らし向きの自慢にも関わっているものです。もし自分が成功してお金を持っていれば、周りから成功者として見られる。人があこがれるような家や車、人がうらやむような安定した暮らしを手にさえすれば、周りに誇ることもできる。そうしてお金は、心にあるプライドや欲を満たそうとするのです。それさえ手に入れれば幸せになれると思わせるのです。

でも、現実にそれらのものは果たして私たちに揺るがぬ本当の安心や満足を与えることができるのでしょうか？残念ながらそうではないのです。たとえお金に安心を置いていたとしても、次の日にお金の価値が暴落したらどうなります？計画を立てることは知恵あることですけれども、どれだけいろいろな計画を立てていたとしても、病気やけがをしたら、その安心は簡単に吹き飛んでしまうのです。目の欲や暮らし向きの自慢も同じです。自分の望んでいるものを手にすれば、確かにその時は一定の喜びを得ることはできるでしょう。でも次第にほかの物が欲しくなるのです。そしてどうにかして揺るがぬ安心を得たい、心の満足を得たいと、心がこの世のことだけに支配されれば、私たちの心はいつまでも満たされないばかりか、次第にそのことによって不満やねたみであったり、人を傷つけたりといったさまざまな罪を犯すことにつながっていくのです。お金というものは、私たちがキリストのうちに安心や満足を見出すことではなく、それ以外の何かに目を向けさせる危険性を持っているのです。だからこそお金は非常に危険なものになります。

そしてこれが教会のリーダーにとって問題であることは、もう言うまでもありません。お金はリーダーが教会を導いていくことに影響を及ぼすことがあるのです。想像してみてください。もし教会のリーダーが、教会の収入や自分自身の安定を何よりも優先し始めたり、ひとりひとりの羊を養っていくことよりも、献金をより多く捧げる人を大事にし始めたらどうなるか——。ある人が罪を犯していたとしても、もし罪を指摘して怒って教会を出て行ってしまったら、教会の財政が安定しなくなってしまう。だから真理を告げるのではなくて黙っていようと、その罪を指摘して厳しいことばをかけられなくなったりするのです。こうしてリーダーがお金に支配されてしまえば、人々を養っていくことだけでなく、教会のさまざまなことを判断し決定することにおいても影響が及んでしまうのです。教会の聖さに関しても影響が及んでしまうのです。教会の監督にとってお金を愛するということは、彼自身と神様の間に間

題を生じさせるだけではなく、教会全体にも深刻な問題をもたらしてしまいます。だからこそ監督は金銭に無欲であることが求められていました。

3. 適応

でも、この資格もこれまでと同じです。みことばは監督だけではなく、信仰者ひとりひとりも金銭に無欲でお金を愛する者でないことを求めています。ヘブル13：5ではこのようにはっきりと記されています。「**金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」**」と。金銭を愛する生活をしてはいけません、今持っているもので満足しなさいとはっきりと書かれていました。それが神様が求めていることでした。だとすれば、私たちの今の歩みは金銭に無欲な者としての歩みでしょうか？私たちは今、自分たちに与えられているもので満足しているのでしょうか？置かれた状況にあって、喜びを見出しているのでしょうか？たとえ自分の望んでいる物が手に入らなかったとしても、心には変わらず平安や満足というものがあるのでしょうか？それともいつも満たされないその状況に不満を覚えて、もっと欲しい、あれさえ手に入りさえすれば自分は幸せになれると、キリスト以外の何かを追い求めているのでしょうか？また、自分よりもお金や持ち物を持っている人に出くわせば、自分がずっとずっと欲しいと願っていた物を持っている人に出くわせば、その人をうらやんだり、ねたみを抱くでしょうか？ほかの人と比べて、自分の置かれた状況に不満を言って、神様への感謝を忘れていないでしょうか？

結局のところ、ここで問われていることは、私たちが満足や安心というものをどこに見出しているかということです。私たちの心が何に一番価値を置いているのか、もっと言えば何を一番に愛しているのかということです。イエス様もマタイ6：24で「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」と言われていました。ここでイエス様が言われていたことは明白でした。私たちはだれひとりとして富と神様という二人の主人を同時に愛し、仕えていくことはできない。まさにイエス様のもとを訪ねて来た金持ちの青年がその典型的な例でした。マタイ19章などにそのことが記されています。彼はお金や持ち物などありとあらゆるものを持っていました。しかし、それでもなお何か重要なものが自分の心には欠けていることに気づいた彼は、こう質問するのです。「先生、永遠のいのちを得るためにはどんなよいことをしたらよいでしょうか」と。これは非常に大切な質問でした。イエス様はその質問に対して「戒めを守りなさい」と答えられます。すると、青年は「そのようなことはみな幼い時から守っている」と応じるのです。そして、その応答を聞いてイエス様は青年にこう告げます。そのことがマタイ19：21に書いてあります。「**帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。……そのうえで、わたしについて来なさい。**」と。イエス様が青年に求めていたことは明白なことでした。すべてのものを捨てて代わりにわたしを手にしなさいと。するとそのことばを聞いた青年は悲しんでその場を去って行ったのです。彼は一体なぜ悲しんで去って行ったのでしょうか？彼は主に従うことよりも自分の財産を大事にしたからでした。彼の心はイエス・キリストにある宝よりも地上の宝を愛していたのです。そして私たちにも同じことが問われています。ふたりの主人を愛することはできません。私たちの心は今何を愛しているのでしょうか？ここでよく覚えていてください。私たちは私たちの心が愛しているものによって、その歩みが影響を受けるということです。それはもし私たちが神様よりもこの世のものを優先し始めているのであれば、神様やみことばに従っていくことよりも、自分の思いや願いというものを優先するようになるということです。だから自分自身の歩みを振り返ってみてください。自分自身が何に時間を使っているのか、何に興味を抱いているのか、何に焦点が当たり、何が自分の生活の中心になっているのかをよく考えることです。そのものに心が支配されていないでしょうか？あなたにとって、キリストこそが、いやキリストに従うことこそが何にもかえがたいそんな宝でしょうか？自分のような愚かなどうしようもない、そんな罪人のために、何の罪もな

い主が十字架にかかって死んでくださったのだ、さばきにしかなったようなこんな私のために恵みによって救ってくださったのだと。こんなすばらしい主こそ私の宝だ、この方のうちにこそ私の本当の満足がある、だから自分はどうな犠牲を払ったとしても、この方に喜んで従っていこう、そんな願いを持って今を歩んでいるのでしょうか？もしイエス様が自分の宝だと知らない人がいるのであれば、きょうそのことを知って帰ってください。

もちろん金銭を愛さないということ、愛さない者として私たちが歩いていくことには難しさはあります。私たちの周りを見渡してみれば、数数え切れないほどの誘惑があるのです。いろいろな戦いがあります。では私たちはその中において自分の心をどうやって守っていくのか、どうすればいいのかをみことばは教えてくれています。大切なのは、神様の臨在をいつも覚えて、この方に助けを求めながら歩いていくことです。なぜなら、先ほど見たヘブル13：5-6の続きに「:5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」:6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」」と書かれていました。どうしてみことばは、金銭を愛する生活をしてはいけませんよと述べた後で、主のことばをここに記していたのでしょうか？それは私たちがいろいろなものに目移りし、満足を覚えるということに弱さを覚える存在だということを知っていたからです。だから言うのです。金銭を愛する生活をしてはいけません、金銭やこの世のものは決してあなたを満足させることはありません。だから今持っているもので満足しなさいと。でもよく考えてみなさい、あなたはほかのどんなものよりもすばらしいもの、主を今持っています。私たちを決して見捨てることはないと約束してくださった、この助け手である方をあなたは持っている。この主がいつもともにいてくださるのだとしたら、ほかに何か必要なものがありますか？

私たちは貧しい時も、富んでいる時も、どんな状況にあらうとも満足をみ出すことができます。でもそれは何も私たちのうちにそのような力があるからではありません。それはただ私たちにとっての宝、決して私たちを離れず、捨てないと約束してくださった主がともにいてくださるからです。主は私の助け手であり、どんな時も私たちを強くしてくださる、そのお方がいつも必要な助けを与えてくださるのです。だとすれば、この神様の約束を覚えることです。この世のものに心を奪われ、金銭を愛するのではなく、このすばらしい神様を愛し、この方に喜びを見出しながら歩いていくことです。そしてこれが12個目にパウロが挙げた監督の資格、金銭に無欲であることでした。教会のリーダーはお金だけでなく何よりも神様を愛し、この方のうちに満足をみ出す者であることが求められていたのです。

○監督とその資格⑬：自分の家庭をよく治め 4-5節

また続けて、監督の15個の資格として13個目にパウロが挙げていたものは、「自分の家庭をよく治めること」でした。いま一度4-5節を見てください。「:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——」と。要するに、教会を監督する者は自分自身の家庭においても、人から非難されるところのない人物であることが求められていました。ここで皆さんもすぐに気づかれたことだと思いますが、パウロはこの資格に関して、これまでよりも多くの説明を加えていました。振り返ってみれば、今まで考えてきた資格というものはひとりの妻の夫であることを除いて、どれも一言で表現されていたものでした。自分を制することや温和であることも、今見た金銭に無欲であることもそうです。それらはすべて一つのギリシャ語で表されていました。しかし、この家庭を治めることに関しては一言ではなく、何と2節にわたって、パウロはほかのどの資格よりも多くのことばを用いて説明を加えていました。要するに、この資格が霊的リーダーにとってどれだけ重要なものであったかということです。

1. 定義

●カギとなる二つのことば：

では一体自分の家庭をよく治める者、それはどのような人物のことを指しているのでしょうか？このことを理解する上で鍵となることばが二つあります。

1) 治める

一つ目は「治める」ということばです。4-5節に二度登場しているこの動詞はもともと「リーダーとしての力を行使する」とか、「先導する」、「組織を率いる」といった意味を持っています。つまりこのことばは、ある人物が導くこと、特にリーダーとしての一面を強調していました。ですから自分の家庭を治める者というのは、まず、みな先の頭に立って、自分自身の家庭を導いていく、そんなリーダーだということです。

2) 世話をする

しかし同時に、二つ目に鍵になるのは5節の後半のところに出てくる「世話をする」ということばです。これには文字どおり、「何かの世話をする」とか「だれかの面倒を見る」といった意味があります。でも、このことばはそれ以上に深い意味があって、そのことを別の箇所がよりわかりやすく描いてくれています。実はこのことばは、新約聖書の中でここともう1カ所、良いサマリヤ人の例えのところでしか出てきません。皆さんもよくご存じの話だと思えますけれども、強盗に襲われて傷ついた旅人を見たサマリヤ人のとった行動がルカ10：33-35に「:33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、:34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』」と記されていました。ここで二度にわたって介抱するということばが使われていましたけれども、これがテモテで用いられていた世話をすると同じものになります。だとすれば、どんな意味を持つのか想像できますよね？確かにサマリヤ人はけがをした者の世話をしました。でもそれは単にけがの手当てをして終わりではなく、宿屋の主人に「介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います」と言っていました。つまり彼は単にその人を心配して気にかけてだけでなく、その人のために犠牲を払い、喜んで愛を示そうとしたのです。相手が抱えている必要をみずから率先して満たそうとしました。そして、このことを踏まえて「世話をする」ということばを考えるのであれば、これはある人物が単にだれかの世話をするだけでなく、愛をもって犠牲を払い、相手の必要を率先して満たそうとすること、その一面を強調しているのです。

この「治める」と「世話をする」という二つのことばをまとめれば、自分の家庭をよく治めるというのがどういう人物を指すのかがわかります。この人物は、家族の先頭に立って導いていくリーダーであるだけでなく、それを率先して犠牲的な愛を持って行う人物だということです。ポイントはこういうことです。家庭を治めるリーダーには、導いていく力と世話をする愛、そのどちらもが必要だということです。どちらかが欠けていてもいけないのです。この二つの要素が家庭を治めていく上で重要なものであるということは、よくご存じだと思います。例えばある父親が家庭を導いていくことだけに焦点を置いて、愛を持って世話をしなかったり、妻や子どもたちと話し合ったり、関係を築くことなしにさまざまなルールだけ設けて、力づくで家庭を治めようとするれば、当然うまくいきません。でも逆に、愛情を示して世話だけをして、父親が率先してリーダーシップを発揮することなく、いつもだれかの顔色をうかがって、正しいことを教えたり、物事を決定しなければ、それも家庭を混乱させることにつながったりします。ですから、家族のリーダーである父親にはどちらの要素も欠かせないのです。

特に家庭を持たれている男性の皆さんはどちらの部分において足りなさを覚えたりするのでしょうか？率先して導いていくリーダーシップの部分でしょうか？それとも世話をする愛の部分でしょうか？もし自分はどちらが欠けているのかよくわかりませんと思う方がいるのであれば、パウロはそのことを判断

する手段もここで教えてくれていました。家庭を治めていく上で、リーダーシップと愛が大切なのだと教えたパウロは、では実際にそれぞれの父親が家庭をよく治めているかどうかを判断するためには、ある部分を見なさいと言うのです。その部分はどこかと言うと、4節の続きを見てください。「十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。」と書いていました。つまり家庭をよく治めているかどうかを測る鍵というのは、その人の子どもがどのようにふるまっているのかにあるということです。もちろんこれは必ずしも長老が子どもを持っていなければいけませんという話をしているわけではありません。しかし、子どもを持っているのであれば、その子どもを見れば父親が家庭にあってどのように治めているのかがわかると言うのです。

ここで皆さんに注目してほしいことばがあります。それはこの4節に出てきていた「従わせている」と訳されていることばです。このことばは子どもが従順で服従した状態にあることを表しています。ここで大切なのは、この従順さというものが子どもが単にからだだけでなく、その心も親のリーダーシップに服従しているということです。これは非常に大切なポイントになります。なぜなら、子どもがからだだけでなく、心も親に従順であるかどうかを家庭をよく治めているかを明らかにしてくれるからです。例えば親が単にルールだけを設けて厳しいだけなら、その子どもは親に怒られたくないから、からだだけは親に従っているかもしれません。でもその心はどんどんと離れていくのです。親のやり方は尊敬できない、親に従うのは単にルールに従わないと叱られるからだ、そうでなければ私は従いたくない、そのような心になってしまうのです。でも逆に、親が愛情を注いで世話をしていたとしても、そこに何のルールや境界線がなければ、その子どもは自分の望みや願いをいつもかなえてくれるから心は親に向いているかもしれません。でも何のルールもないからこそ、わがままでいつも問題ばかりを起こすようになってしまったりするのです。心は向いていたとしても、からだはどこかへ行っているかもしれません。だからこそ家庭を治めていくリーダーというものは、威厳を持って子どもが喜んで従いたいと願うように、率先して導き、愛を持って世話をして行くという、このどちらもが大切になるのです。そしてそのようにして家庭を導いていくこと、子どもが親のリーダーシップにしっかりと従っているということが監督に求められていた条件でした。

これと同じことはテトスの中でも見て取ることができます。テトス1：5-6のところに、パウロはテモテと同じようにテトスに対しても長老の資格を説明していました。その中で「:5 私があなたをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。:6 それには、その人が、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、その子どもは不品行を責められたり、反抗的であつたりしない信者であることが条件です。」と記されています。要するに監督になる者は子どもをしっかりと導いていて、従わせている人物でなくてはならないということです。ただし、ここでよく議論になるのがこの箇所に出てくる「信者であることが条件です」という、この「信者」ということばです。このことばは興味深いことに、「信仰」と訳すこともできるのですけれども、同時に「忠実な」とか「誠実な」と訳すこともできます。だからこそある人は監督の子どもは信仰を持った信者でなければいけないと考え、ある人は監督の子どもは救いに関係なく親に忠実であることが必要なのだと考えていたりするのです。このことばが信仰と忠実、どちらの意味とも取れるからこそ、私自身も尊敬する数々の先生の中でも、このことばをどう解釈するかに関してはさまざまな意見があります。でも個人的には、この箇所は子どもの救いではなくて、子どもの親に対する忠実さを教えていると考えています。いろいろな理由を挙げることは確かにできるのですが、少なくとも言えるのは、救いというもの神様から与えられるものだからです。神様だけが人を救うことができます。たとえどれだけ父親が神様の前を正しく歩み、子どもを愛してみことばを熱心に教えたとしても、そのことが子どもの救いを確約することはありません。私たちのうちにはだれひとりとして人を救う力はないのです。だからこそ教会のリーダーの資格として、監督の子どもが救われた者でなくてはならないというのは、神様にし

かできないことを求めていることになるのです。ですからここで問われていたことは、監督の子どもが救われているかではなく、その子どもが親のリーダーシップに忠実に従っているかどうかだと考えることができます。親は子どもをしっかりと導き、子どもはその親に従っていることが監督に求められていた条件でした。

2. 重要性

ではここで考えてみてください。パウロは一体なぜ監督がこのように家庭をよく治める者であることを求めていたのでしょうか？どうして子どもや家庭がどうであれ、その人自身が神様を愛して、忠実に歩んでいれば問題ないとは言われなかったのでしょうか？その答えが5節のところに記されていました。Iテモテ3：5に「自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう」とあります。答えはシンプルです。それは自分の家庭をよく治めることができなければ、それよりも大きな神の家、教会を導いていることなど到底できないからでした。パウロは言うのです。家庭こそがその人物のリーダーシップを測る最高の場所なのだ。その人物がリーダーとしてどのように自分の妻を愛し、子どもを従わせているか、その姿が教会の監督として仕えるのにふさわしいかどうかを明らかにしてくれると。だからこそ監督にとって、自分の家庭をよく治めているということは非常に重要なことでした。

3. 適応

しかし同時に、この資格も監督だけでなく、私たちひとりひとりが考えるべきものでもあるのです。特に家庭のリーダーである男性の皆さんは、今、みことばに基づいたリーダーシップを自分の家庭において率先して発揮しているでしょうか？家庭のリーダーはあなたでしょうか？それとも奥さんや子どもでしょうか？また、あなたのリーダーシップは同時に犠牲的な愛を伴うものでしょうか？ここで勘違いしたくないことは、みことばの教える愛というものは間違いや罪を指摘しないようなものではないということです。箴言13：24に「むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。」とあります。子どもも罪人です。だからこそ間違っていることをしているのであれば、愛や忍耐をもって神様の前に何が正しいのかを教える必要があるのです。また、よく考えてみてください。あなたのリーダーシップのうちに家族の者はどんな特徴を見出すでしょうか？あなたが家族を導いていこうとするその姿のうちに、周りの者はどんなものを見出すでしょうか？みことばに対する揺るがぬ信頼でしょうか？キリストに対する愛でしょうか？福音に対する熱意でしょうか？一体どんなあかしや模範というものを家族の前で立てているでしょうか？そしてこの点においては、家庭を持っている男性だけではなく、女性や独身の者もみな同じです。私たちは家族の前でどんな歩みをしているでしょうか？私たちは家の外ではいろいろ取り繕うことはできます。でも家族の前では、その本当の姿が現れるのです。その姿は主の喜ばれるものでしょうか？それともそうではないでしょうか？自分の家庭をよく治めていくことが13個目にパウロが挙げた監督の資格でした。

〇まとめ

さて、きょう私たちは監督の資格の12個目と13個目についてともに考えてきました。改めてどうだったでしょうか？監督はお金を愛する者ではなく、神様を何よりも愛し、この方に満足を見出す金銭に無欲な者であることが求められていました。また監督は、家族の先頭に立って、犠牲的な愛を持って世話をする、自分の家庭をよく治める者であることも求められていました。これらの基準こそ教会を導くリーダーが満たしていなければならない資格だったのです。

でも同時に、これらは私たちひとりひとりが目指していくべき目標でもあります。確実に言えることは、私たちはこれらの点において弱さや失敗を経験してしまうということです。ある人は自分はすぐにいろいろな欲に負けてしまう、家庭をよく治めていくこともできていないと思ったかもしれません。でも、もしそう思ったのであれば、よく覚えることです。確かに私たちは弱く愚かな者で、知恵もありま

せん。しかし、私たちには必要な知恵や助けを与えてくださる主がいつもともにいてくださるのです。主が私の助け手であることに信頼を置くことです。この方がともに歩んでくださるからこそ、私たちはこの方にあって変えられ、成長していくことができます。だとすれば私たちは、罪を犯せばそれを悔い改め、助け主なる神様を覚えて、成長を目指して歩んでいくことです。

今週もこの目標を目指して、ともに歩んでいきましょう。